

6 進路指導の基本的な考え方

小学校段階からの「生き方の指導」

進路指導においては、子どもたちに対して適切なガイダンスを実施することが大切です。ここでいう進路指導とは、「子どもたちが将来を見据えて主体的に進路選択できる能力や態度を育成するための指導」であり、将来の進学や就職、その先の夢や目標の実現に向けて、小学校段階から中学校卒業までの9年間を見通して、計画的かつ子どもたち一人ひとりのキャリア発達に配慮して行うものです。

進路指導コラム ～小学校からの積み重ねがあつてこそ～

小学校での取組みが中学校卒業後の進路選択につながったエピソードを紹介します。

数年前のこと、ある中学校の3年生担任のB先生は、クラスのAの進路指導について悩んでいた。

Aはこれまで自分からほとんど話すことがなく、進路についてもどのように考えているのか、本音のところを聞くことができなかったからだ。2学期の1回目の進路懇談でも、Aは将来のことについて何も話さなかった。B先生はそれから、休み時間や昼休みにひとりでベランダにいるAを見つけては、他愛のない話をし続けた。

秋も深まったころ、いつものベランダでAが突然ポツリと「アニメーターになりたい」と言った。

B先生は、「いつからその夢を考えるようになったの？」と聞くと、「小学校5年生のときから」と答えた。もう少し詳しく聞くと、小学校の職業講話の取組みの際、プロのアニメーターの方が学校に来て、大好きなアニメの制作裏話をしてくれたり、簡単なアニメーションの仕組みを体験的に教えてくれたりしたとのことだった。Aはその経験がとても印象に残ったようで、その時から将来はアニメーションの仕事に携わりたいという思いを持っていたとのことだった。

B先生は、もっとその当時のことを知りたいと思い、Aの小学校時の担任であるC先生のところへ行き、Aの学習時の感想や卒業文集などを見せてもらった。そこには確かに、将来の夢についてのAの思いがしっかりと書かれていた。B先生はこのとき、小学校からの積み重ねがあつてこそ、子どもたちの今の成長した姿があることを実感した。また、C先生は、小学校の取組みが中学校での進路選択に具体的に繋がっていることを実感した。

二人の先生はそれぞれの学校でAの話をしたところ、多くの先生たちが改めて、中学校区でのキャリア教育・進路指導の大切さを共有したとのことだった。

その後、Aは普通科の高校に進学したが、高校卒業後はアニメーションの専門学校に進み、今も夢に向かい続けているそうである。

進路指導の在り方

文部科学省は、以下のように「進路指導の在り方」を示しています。

◆進路指導の在り方

(1) 基本的事項

- 進路指導は、生徒が自らの生き方を考え、将来に対する目的意識を持って、主体的に自己の進路を選択し、生涯にわたる自己実現を図っていくことができるような能力や態度を育成することが重要であり、このため、各学校が進路指導の目標を持ち、その実現を目指して教育活動全体を通じ計画的、組織的、継続的な指導を行っていくことが必要であること。
- 進路指導を効果的に進めていくためには、進路指導主事を中心とした校内の組織体制を整備し、学級担任をはじめ、教員が相互に緊密な連携を図り、それぞれの役割・立場において協力して指導にあたる必要があること。また、必要に応じて、生徒指導主事との連携も図ること。
- 進路指導が生徒の生き方の指導であることを踏まえ、生徒の意欲や努力を重視し、生徒が自ら選択した進路を堂々と進んでいけるように、生徒の将来における自己実現を応援する姿勢をもって指導に当たることが重要であること。
- 教員は、生徒一人一人に対する共感的理解をもって生徒理解を深めながら進路指導の充実を図り、生徒が抱える日常生活に関する不安や悩み等を積極的に受け止めるように努めること。

(文部科学省「生徒指導・進路指導の改善等について(通知)」平成28年)

進路ガイダンスと指導計画の作成

進路ガイダンスにおいては、子どもたち一人ひとりが自分の可能性を見出し、「やりたいこと」や「できること」を広げるといった観点から、進路に関する適切な情報提供、生き方や進路についての悩みや迷いを受け止めるための相談機能の充実が求められます。

指導計画の策定にあたっては、子どもたちが主体的に進路の学習や活動に取り組むことができるよう、自発性を促す仕組みづくりを行うとともに、特に、学級活動に関する指導計画の立案にあたっては、題材の体系化など進路指導の構造化を図り、それを系統図などにまとめて、教職員の共通理解を促すことが必要です。

また、これらの取組みの実効性を一層高めるために、子どもたちの実態や学習ニーズを的確に捉え、常に指導計画・内容・方法などを点検し、見直すことが必要です。

FAQ

Q. 中学3年の進路指導で、生徒が自分の進路を具体的にイメージすることができるようにするには、何をすればよいですか？

A. 進路指導は、子どもの将来に大きな影響を及ぼします。担任だけでなく、学年、学校全体で進めていくことが大切です。困ったときや迷ったときは、学年の教員や、進路指導主事に相談しましょう。進路指導協議会等、地区の進路指導にかかわる組織と連携して、情報収集することも有効な手段です。

子どもの進路実現に向けて、データだけでなく、子どもの得意なことや適性、家庭状況等でできるだけ多くの情報をもとに、その子どもに合った進路指導を行いましょう。

すべての生徒の進路を支援していくために

○信頼関係を築く

生徒・保護者が学校を頼りとして何でも相談できるという安心感を持つことなしに、進路について本音で話し合うことはできないでしょう。そのためには、普段より生徒や保護者との信頼関係をていねいに築き、進路選択の際には、生徒や家庭に関する様々な状況を考慮した進路指導を行う必要があります。

○情報収集と情報の提供

昨今、進路選択の幅が多様化していることから、各学校の情報を得ることができる体験入学や学校説明会について、案内等を全体に周知するとともに個別にも情報提供しなければなりません。また、令和6年度以降、私立高校等授業料無償化制度が拡充され、令和8年度には、全学年で授業料が無償となります。このような情報や高校生等奨学給付金、奨学金制度などについても、正確で確実な情報提供を行う必要があります。

あわせて、配慮が必要な児童生徒の進路に係る情報について、小学校段階から本人及び保護者に提供しておくことが大切です。そのために、小中間で連携した進路指導を行う必要があります。

○学校としての進路指導方針をすべての教職員で共有する

学校としての進路指導方針を、校内で共通理解するとともに、学年・学校全体のサポート体制づくりや進路指導の取組みの推進が求められています。

また、生徒一人ひとりが中学校卒業後、進路先で自分らしさを発揮し、将来の目標に向かってどのような生き方をしていくのかということについて、教職員間で共有しましょう。生徒本人の個性や特性、興味や関心、将来の目標などとともに、家庭の経済状況や人間関係なども考慮することが必要です。このような積み重ねにより、「進路未定者を出さない進路指導」をめざすことが大切です。

○外国にルーツのある生徒・日本語指導が必要な生徒への支援

言語や文化が異なる中で、生徒本人だけでなく、保護者にとっても、進路選択は分からないことも多く、不安を抱えていることもあるため、進路にかかわる情報はより丁寧・確実に保護者に届くように配慮が必要です。

大阪府では、そのような生徒が安心して学校生活を送り、主体的に進路を選択できる取組みを行っています。

・多言語進路ガイダンス

各地区で10月から11月頃に、進路の説明、先輩の体験談、高校教員による学校説明を聞くことができ、高校入試制度や学校生活などについて個別に相談できる多言語によるガイダンスを開催しています。

・OSAKA 多文化共生フォーラム

夏休み前に日本語指導が必要な中学生や外国にルーツのある中学生が、同じ言語を母語とする他校の中学生と出会ったり、他の学校での多文化共生の取組みを知ったりする機会として開催しています。くわえて、先輩の体験談や、高校教員による学校説明も実施しています。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/kikokutoniti-sapo/>



○中退防止・進路未定者への支援

中途退学者数は高校1年が多く、進路変更をした割合が最も高くなっています。未然防止に向けては、合格のための情報だけでなく、どのようなことが学べ、どういった資格を得ることができるのか等、入学後の情報提供や、中学校から高校への円滑な移行のため、学校間で生徒の様子を共有するなどの連携も必要です。進路未定者の支援として、卒業後も家庭訪問や懇談等、進路支援のための継続的な関わりが有効です。不登校や引きこもりといった課題の場合は、地域若者サポートステーションなどの関係諸機関と連携した支援を検討することも大切です。